

図版 No	遺物 No	取上 No	遺構／層位	種別	細別	残存 (%)	反転	器径 (cm)	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	その他
19	55	86	SR02	須恵器	摘蓋	10						灰色	
19	56	107	SR02	須恵器	高坏	5	反				9.6	灰色	
19	57	97	SR02	須恵器	盤	5	反			16.0		灰色	
19	58	106	SR02	須恵器	壺	5	反			17.2		灰白色	
19	59	106	SR02	須恵器	壺	5	反			13.0		灰黄色	自然釉
19	60	107	SR02	土師器	壺	5	反			20.0		浅黄橙色	古墳時代前期
19	61	97	SR02	土師器	甕	5	反			23.0		浅黄橙色	
19	62	96	SR02	土師器	甕	5	反			24.0		浅黄橙色	
19	63	107	SR02	土師器	甕	5	反			24.0		にぶい橙色	
19	64	96	SR02	灰釉陶器	碗	20	反				7.0	灰黄色	
19	65	106	SR02	灰釉陶器	碗	20	反				6.6	黄灰色	
19	66	105	SR02	灰釉陶器	碗	5	反				7.0	灰白色	
19	67	106	SR02	灰釉陶器	碗	10	反				7.0	灰白色	
19	68	92	SR02	灰釉陶器	碗	5	反			15.0		灰白色	
19	69	106	SR02	灰釉陶器	皿	5	反			15.0		灰白色	
19	70	107	SR02	山茶碗	碗	10	反			15.0		黄灰色	
19	71	106	SR02	山茶碗	碗	10	反			14.2		灰白色	
19	72	106	SR02	山茶碗	碗	10	反			13.0		灰白色	
19	73	96	SR02	山茶碗	碗	10	反			16.0		灰白色	
19	74	106	SR02	山茶碗	碗	5	反			14.0		灰色	
19	75	96	SR02	山茶碗	山皿	40	反		1.6	9.0	5.0	灰白色	
19	76	106	SR02	山茶碗	山皿	10	反			9.9		灰白色	
19	77	96	SR02	山茶碗	山皿	10	反			9.0		淡黄色	
19	78	76	SR02	土師質土器	内耳鍋	10	反			19.8		浅黄橙色	
19	79	92	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.6		浅黄橙色	
19	80	76	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.6		浅黄橙色	
19	81	107	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.8		浅黄橙色	
19	82	76	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			24.5		浅黄橙色	
19	83	14	SR02	土師質土器	内耳鍋	5	反			24.7		浅黄橙色	
19	84	76	SR02	土師質土器	羽釜	5	反	24.4		22.1		浅黄橙色	
21	85	92	SR02	土師質土器	カワラケ	30	反		2.6	11.0	6.0	浅黄橙色	ロクロ成形
21	86	107	SR02	土師質土器	カワラケ	10	反			9.6		浅黄橙色	
21	87	89	SR02	土師質土器	カワラケ	10	反			8.4		浅黄橙色	
21	88	92	SR02	土師質土器	カワラケ	10	反		2.3	11.0	7.3	にぶい黄橙色	
21	89	106	SR02	陶器	縁釉皿	5	反			9.8		灰黄色	戦国時代、施釉
21	90	120	包含層	須恵器	坏身	5	反	13.6		11.3		灰色	
21	91	117	包含層	須恵器	有台坏身	10	反				9.4	灰白色	
21	92	3	包含層	須恵器	甕	5						灰色	奈良時代
21	93	2	包含層	土師器	甕	5	反			22.0		浅黄橙色	
21	94	2	包含層	灰釉陶器	碗	10	反				7.4	灰白色	
21	95	72	包含層	山茶碗	碗	5	反			13.0		灰白色	
21	96	3	包含層	山茶碗	碗	10	反				7.6	灰白色	墨書
21	97	3	包含層	山茶碗	碗	5	反				6.6	にぶい黄橙色	
21	98	120	包含層	山茶碗	碗	5	反			19.0		灰黄色	施釉
21	99	76	包含層	貿易陶磁器	青磁	5						灰白色	
21	100	76	包含層	土師質土器	カワラケ	10	反				5.5	浅黄橙色	糸切痕
21	101	72	包含層	陶器	播鉢	5	反			26.2		明赤褐色	15世紀
21	102	72	包含層	陶器	播鉢	5	反			32.0		淡黄色	15世紀
21	103	87	包含層	土師質土器	内耳鍋	5	反			23.0		浅黄橙色	
21	104	87	包含層	土師質土器	内耳鍋	5	反			22.7		浅黄橙色	
21	105	3	包含層	土師質土器	内耳鍋	5	反			21.0		橙色	
21	106	94	SR02	土製品	土馬	20						にぶい橙色	11.2g
21	107	96	SR02	土製品	土錘	30						にぶい橙色	1.5g
21	108	96	SR02	土製品	土錘	100						明赤褐色	0.3g

表 6 遺物観察表 2

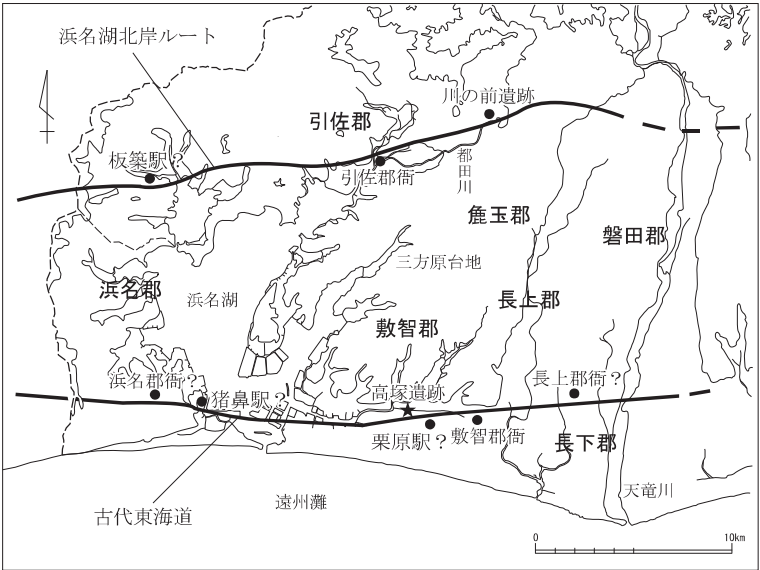
第5章　まとめ

高塚遺跡は、次の2つの点で重要かつ注目される遺跡である。第1に、畿内と関東地方を結ぶ重要な官道である古代東海道のルート上に位置している点である。第2に、西遠江における縄文時代の集落分布の中で最南端に位置している点である。後者については、今回の高塚遺跡第2次発掘調査で3個体分の縄文土器を発見して、はじめて最南端の集落であることが明らかになった。

そこで本章では、前者に関連して、古代東海道の道筋についてのある疑問点と、後者に関連して、南部海岸平野における砂堤上の縄文集落の展開とそれらの集落がもつ共通のある問題点について簡単に触れて、まとめとしたい。

第1節　古代東海道の道筋

2つの道　西遠江には、古代から現代まで、常に2つの重要な東西交通路が存在している。1つは浜名湖の北岸を通り抜けて天竜川中流を渡る北ルートであり、2つ目は浜名湖の南岸を通り抜けて天竜川下流を渡る南ルートである。これらはいつの時代も補完しあって現代まで続いている。原始・古代には、豊川河口、浜名湖今切口、天竜川河口の3つの難所を避けて通る北ルートが大いに利用されたと考えられている。そして奈良時代以降になると南ルートが本街道



第22図　律令期の西遠江

(古代東海道)となり、北ルートは南ルートが通行不能になった時のための脇街道の役割を担った。中世から江戸時代も同様に、南ルートが東海道となり、北ルートは姫街道（本坂道）と呼ばれる脇街道の役割を果たした。そして近代に鉄道網が整備されると、南ルートに東海道本線が建設され、北ルートに二俣線が建設された。

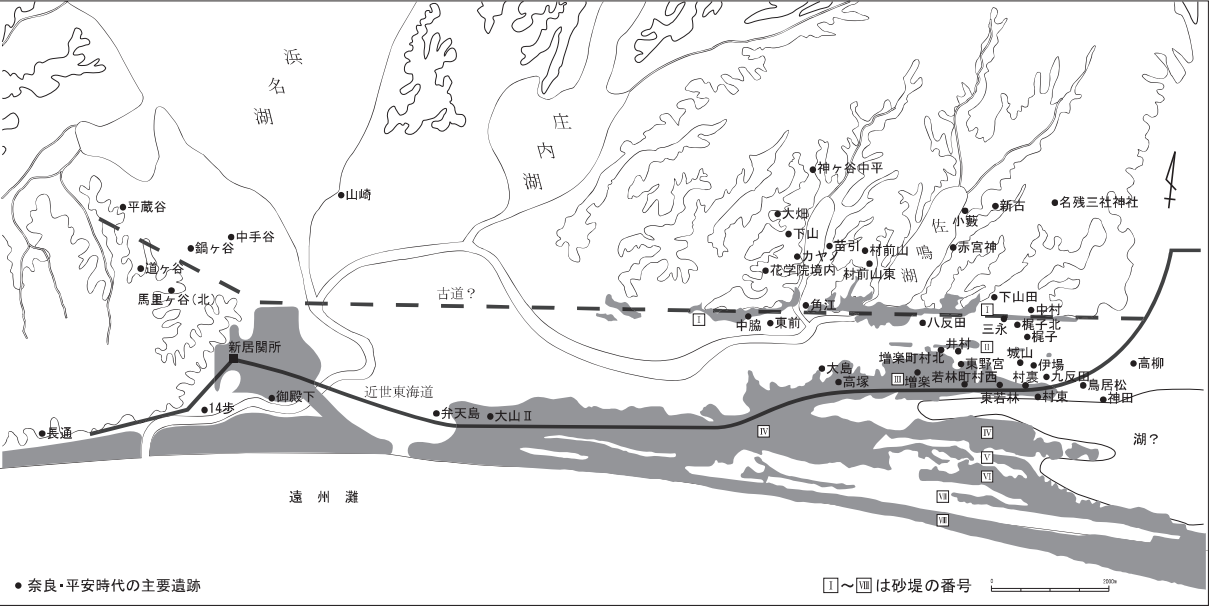
湖底遺跡　浜名湖の南半部には、多くの地点に縄文時代～鎌倉時代の湖底遺跡が存在する。ゼゼラ遺跡、スモテ遺跡、渚園遺跡、村櫛海水浴場沖遺跡、村櫛海岸遺跡、弁天島遺跡などである。これらの湖底遺跡が存在する原因は、15世紀末に発生した急激な地盤沈下と考えられている。そして15世紀以前の浜名湖南岸は、第23図に示すように広い範囲が陸地化しており、現在の庄内湾は小

さな湖にすぎなかった。その平野の中を浜名川が蛇行して南流していたと考えられている。

1つの疑問点 奈良・平安時代における古代東海道の道筋は、近世東海道とほぼ同じルートと想定されている。すなわち鳥居松遺跡付近から第3砂堤上を西進し、高塚遺跡を通過するとやや海岸方向にカーブして現在の舞阪港付近に至るルートである。しかしこのルートには、1つの疑問点がある。それは“なぜ”ルートを南へ曲げたのかという点である（第23図参照）。当時、浜名湖の南岸一帯は陸地化していたはずであり、敷智郡衙であった伊場遺跡群から浜名郡衙が想定される鷺津付近まで、ほぼ直線ルートで行けたのである。曲げる必要は何もなかった。古代の官道は直線ルートを基本に設計されていたのではなかったのか。そこで考えられるのが、15世紀末に浜名湖の南岸一帯が地盤沈下したとき、古代東海道の一部が浜名湖および庄内湾の湖底に沈んだために、近世東海道ではルートを南へ曲げざるを得なかったという仮説である。

一直線の大溝 最近、興味深い遺構が中村遺跡で発見された。中村遺跡の発掘調査は雄踏街道の拡幅に伴うものであったため、調査区は幅6～10 m、東西方向へ全長約700 mの細長い形状をしていた。その細長い調査区の中で東西方向へ続く推定650 mの人工的な溝を検出した。上幅が約4 m、下幅が1.5～2 mの規模をもち、壁面の崩壊を防ぐために、杭を打ち粘土を貼り付けて養生してあった。溝の下層から7～8世紀の須恵器、土師器、土製品、木製品、木簡などが多数出土し、上層から10世紀の灰釉陶器が出土した。検出した溝は1条であったが、調査区の外にもう1条ある可能性がある。この溝は大規模な区画溝もしくは道路の側溝である可能性が指摘されている。静岡市曲金北遺跡で発見された古代東海道の側溝は幅4～5 mであり、中村遺跡の大溝とほぼ同じである。遺物の出土状況も類似している。

第1砂堤上の道 この中村遺跡の大溝は道路の側溝と確認されたわけではない。しかし第1砂堤上に古代東海道を想定できる好条件が揃っている。以下のようなものである。①地盤が安定してい



第23図 古代東海道想定図